

シリーズ 防災・思いの丈

今回は「備える心」について考えてみましょう。

日本水フォーラムが、2008年10月に発信したニュースレター「勝海舟と堤防」にある「氷川清話（ひかわせいわ）」をご紹介します。

幕末維新を駆け抜けた勝海舟の談話集。

勝海舟は、赤坂の氷川神社の近くに居を構え、そこで弟子や新聞記者等に語った話が



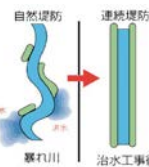
「氷川清話」と呼ばれるものです。当時の勝海舟は、明治新政府にもすけすけと文句を云い、煙たがられていたようです。その新政府に文句を云うなかで、治水事業について辛辣に批判している箇所があります。

氷川清話に「治水と堤防」という章があります。明治29年に利根川、隅田川、木曾川、信濃川、淀川などが記録的な洪水被害に見舞われました。この大洪水の報道に接して勝海舟が新聞に寄せた談話です。

『治水のことは十分注意しろと言っていたのに今回の災害だ。明治政府は、少しは目が覚めたか。江戸幕府の堤防の造り方は、明治政府の堤防の造り方と違った。江戸幕府は堤防の堤脚に注意したものだ。堤防を築造するときは、地下を2メートル近く掘り、底から段々と締め固めた上で、やっと外に顔を出したものだ。堤防が外に現れたら、ただ泥土を積み上げ柳を植えたりしておくだけだった。見かけは悪いけどどんな洪水にも安心していられた(略)尾張の織田信長も、駿府の加藤清正もみな地下を掘り込んで、地盤を固めてから堤防を築いた。かつては、ただの素人でさえこのように丈夫に堤防を築いたものだ。それが今日この頃、やれ何々博士とか、やれ何々技師だけができるものと思っ、高い給料を払ったあげく、少しばかりの洪水で堤防がブクブクと壊れてしまう。』

この勝海舟の堤防築造の指摘は、土木工学的には全く正しいのです。日本の堤防は「大蛇」の上に乗っています。堤防は洪水との闘い以上に足元に住む大蛇と闘わなければなりません。勝海舟はそれを見事に指摘しています。

さて、堤防が築造される以前の河川は、山地から扇状地へ出ると一気に広がり、あちらこちら流路を乱しながら、いくつもの頭を持つ大蛇のように海に向かって流れていました。中世から近世にかけて、この扇状地で田畑が開発、人々が住みつき集落を形成、人々は力を合わせて堤防を築き、洪水をなだめすかせて生きてきました。近代になり、流域には工場が誘致され、住宅地が集中していきました。21世紀の今、旧河道を目にすることはありません。しかし、水が通りやすい旧河道の砂礫層（地下水が流れる）は今でもあ



ります。一本の樋（とい）に押し込まれた河川は、洪水の度にすき間があれば堤防の外へ吹き出そうと虎視眈々と狙っているのです。もし堤防の下から濁水が吹き出せば、堤防は決壊にいたります。勝海舟が「堤防の下を掘って基盤を強化せよ」という指摘は、絶対の真理なのです。地下の大蛇の行く手を遮り、堤脚の破壊を防止することが堤防築造の原則です。（ニュースレター終）



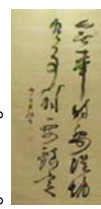
今回の「備える心」を伝える為にこのニュースレターを紹介しました。なぜ今回なのか？それは「備える心」は**見えているものだけを対象に防災活動「備え」をしてもダメだ**と云うことです。「自分の所に災害が襲ってくる。その為の備えをしよう」。確かに大切なことです。でもそれだけではダメだと云うことです。襲ってくる災害は、私たちの想定を超えたものがやってきたとき、大災害、甚大な被害が発生しています。

「災害の為だけの防災」を行うと想定外の災害に簡単にやられてしまうのです。『洪水になる。水が溢れる。堤防を高くしよう』すると水は堤防の下から堤防を突き破り、吹き出し、堤防を決壊させる。そして大災害が発生となっているのです。



備える為には、**災害の為の目先の対策**だけではなく、想定される災害とは縁が無さそうなところからも対策を講じることが重要だと云うことです。加古川グリーンシティ防災会が推奨する「**あいさつを通して災害に備えること**」もそのひとつ。「あいさつ」が防災にどう繋がるのか、一見してよく判らないものです。しかし、いざ災害発生となったとき、普段挨拶を交わす人々は、ひとつの目標「復興を目指す」に向かって即座に進みます。また、普段から挨拶をすることで、自分の持つ小さな知識は、挨拶を交わし会話をした人達の知恵や知識も含めて**大きなデータベース**になります。すると自分の知らなかったこと、怠っていた備えが見えてきます。その怠っている備えに自分ひとりではなく、みんなで力を合わせ備えていくのです。

備える能力は、普段から自分の住む地域や自分の行動範囲の情報を入手することでアップします。その為にも、情報は自分から入手する努力をしなければ誰も教えてくれません。いや、伝えたとしても「**聞かえていない・聞いていない**」なのです。何度もお伝えしていますが「**聞く心**」を持たなければ、どんな言葉も届けることはできません。



勝海舟が大切にした言葉に『**無事時要堤防、有事時要鎮定**』があります。これは「**平穏な時には、災難の芽を摘み。事態が起こった時には、心静かに対処すべし**」と云うことで、災害が発生するまでに備えよと云うことなのです。 次回は「災害が発生するまでに」